



# 転生前のチュートリアルで 異世界最強になりました。3

## 準備し過ぎて第二の人生は イージーモードです！

Q L P H F L I G H T

---

小川悟  
*Ogawa Satoru*



アルファライト文庫

## CONTENTS

後日談

281

番外編

271

本編 ロンダ騒乱

007

## アーリン

ロンダの領主の娘。  
魔術師としての才能を秘めている。

## メイリン

開拓村でテンマが世話をした家の子供。  
明るく、人懐っこい性格。

## シャムロック

ビビとジジの叔父。  
とある事情から、  
彼女達の父親を恨んでいる。

## ドロテア

辺境の町・ロンダの魔術師ギルドのギルマス。  
妖艶だけどポンコツ!?

## ジジ

人族の少女。  
泣き虫で不器用だが  
頑張り屋で、妹のビビを  
常に気に掛けている。

## ビビ

うさぎじみん  
兎獣人の少女。  
活発な性格で、  
姉のジジを慕っている。

## テンマ

33歳で命を落とし、  
異世界に転生することになった  
元ゲーマー。  
ゲームの知識で  
この世界を楽しみ尽くす。

## ミーシャ

冒險者に憧れ、  
開拓村を出た狐耳少女。  
段々ストイックに……!?

## シル

テンマの従魔になる  
シルバーウルフの子供。  
食いしん坊&甘えん坊。

登場人物紹介

。本  
編。

# ロンド騒乱

I became the strongest in another world  
in the tutorial during my lifetime.

## 第1話 研修成果

俺、テンマは今、空間ごと複製できる空間魔術——ディメンションエリアを用いて生成したどこでも研修施設——D研内の仮設住居にて、みんなの夕飯を作っている。料理の最中つてつい考え事をしてしまうんだよな。

俺はこれまでの出来事を振り返る。

日本で三十三歳の時に命を落とした俺は、十四歳の少年の姿で異世界に転生させられることに。

転生先で簡単に死ないように三ヶ月の研修を受けることになったのだが、蓋を開けてみればそれが終わったのはなんと十五年後。しかし、その中であらゆる工夫をしたおかげで、俺のステータスはなかなかチートなどになってしまった。

研修後、俺が放り出されたのは、テラスという名前の世界にある辺鄙な村・開拓村の近く。

右も左も分からぬ環境に戸惑つたが、開拓村は気のいい人ばかりで、素性の知れない俺にも良くしてくれた。

そして一ヶ月半くらい村でのんびりした生活を送った後、そこで出会った狐獣人の美少女であるミーシャと一緒に村を出て、冒険者として活動することになったのだ。

俺はその後のめまぐるしい展開を思い出して、溜息を吐く。

そう、開拓村を出て立ち寄った辺境の町、ロンダでは思いがけず大分目立つてしまつている。

まず、偶然立ち寄った孤児院から鍊金術の才能に長けた少女であるジジを鍛えるために雇い、その妹であるウサ耳幼女——ピピも養うことになった。

これはいい。目立つようなことではないし、何より俺の意思で彼女達を迎え入れたからな。

問題はそれ以外だ。

国の中でも折りの魔術師かつロンダの魔術ギルドのギルドマスターで、英雄とまで呼ばれるドロテアさんに、強く興味を持たれてしまったのが運の尽き。

彼女の研究バカつぶりに振り回された拳句、ロンダの領主の娘であるアーリンの家庭教

師まですることになつてしまつたのである。

状況に流されすぎてしまつたことに今更ながら後悔してみるが、もう遅い。

……とはいえ、この状況が最悪かと言えばそうでもない。

これまで自分とミーシャのデータしか取れなかつたため、それ以外の種族・素質がどう成長できるのかを知れるのは願つてもないことだ。

この世界には素質というものがあり、アルファベットで表示される。力の素質が高ければ力持ちになりやすく、魔術の素質が高ければ魔法系のスキルに秀でやすい、といった具合。

またスキルごとにも素質がある。SSSが最大プラス補正<sup>はせい</sup>。Cが補正なし。D、E、F、G、Hはマイナス補正で、Hが最大マイナス補正となる。補正が強いほどそのスキルは得やすいのだ。

俺はどの分野も特化させず、バランスを重視する設定にしていて、すべてのスキル素質がC。だから、素質がCより上の人間は、俺より強くなる可能性を秘めていると言える。また、種族素質というものもある。

種族素質は高ければ高いほど各能力値の初期値やスキル素質が高くなるのだ。

俺は種族素質もCで、アーリンは俺と同じ人族だけど種族素質がS。彼女のような素質を持つ人物がこの世界にたくさんいるとなると、俺もうかつか正在中

られないが……現状それほど心配はしていない。

なぜならこの世界の人々はそれほど育成方法に頓着していないから。

俺はまず各数値を育ててからレベルアップさせることで、より効率よく能力の上限を引き上げるような育成方法をとつていて、それをドロテアさんに伝えたところ、大層驚かれた。

どうやらテラスで生きる者達は数値の上がり方を検証するというより、ただレベルアップにのみ注力しているらしい。育成においてその差は大きいと思う。

現にアーリンとジジの育成を始めて十日経つたが、満足のいく研修結果が出ている。

アーリンはともかくジジは鍊金術と、そして料理の素質が高かつたから勢いで雇つただけで、ミーシャほど急いで研修をさせる必要はない。

体力の少ない彼女にはまず、人並み程度の体力をつけてもらおうと考えていたのだが、ジジはたつた十日の研修で大人並みの体力や力をつけて、今では必ず料理の手伝いもしてくれる。

しかし、不器用なのは変わらないので怪我<sup>けが</sup>することも多い。

今もジジは俺の隣<sup>となり</sup>で野菜を切つてくれているのだが――

「あつ！ また指を切つちゃいました。えへへ」

どうやらまた手を滑らせたようだ。

「ど、どうしよう。すぐに治療しないと！」

俺が焦りながら言うと、ジジは首を傾げて不思議そうな顔で俺を見る。

くうく、メガネの娘も可愛いじゃねえか！

そう、普段ジジは裸眼なのだが、料理や鍊金術用に解析効果を付与したメガネを渡してある。今も料理中だからメガネをしており、普段と違った可愛さを感じる。

ジジは一緒に生活するようになつて食生活が充実したのか、徐々に顔色や肌艶まで健康的になつていていた。それにより可愛らしさや女の子らしさが増して、ふとした拍子に俺はドキッとしてしまう。

「テンマ様は不思議ですね。訓練のときは平気で怪我させるのに、これぐらいで驚くなんて変ですよ。うふふふ」

いや、確かにそうだけど……。

研修の中には物理攻撃耐性スキルを取得させるために、わざと怪我をさせる訓練もある。

でもジジは冒險者になるわけではないので、そこまでさせるつもりはない。アーリンも貴族のお嬢様で護衛もいるから、物理攻撃耐性スキルは必要ないと、俺はそもそも考えていたのだ。

一日目は俺がざつくりと研修の説明をしつつ扱き、翌日からは完全にミーシャが主導という流れである。

そして三日目の夜に俺がミーシャに夜間訓練をつけようと訓練場所に行くと……そこには怪我をしたアーリンとジジ、そして仁王立ちするミーシャがいた。

彼女は俺を見つけると得意気な表情で、「訓練において怪我させる必要性を自分で説明するのが難しいから、代わりに話してくれ」と言つてきたのである。

いや、必要性を説く前に訓練に入るなよ……なんならアーリンやジジにそんな訓練は必要ないよ、なんて思いながらも、怪我することで物理攻撃耐性スキルが取得できることや、HPの大大幅な減少によりHP最大値が増えることを説明した。

アーリンやジジは辛うじてしながらも納得したようで、それから夜間訓練に当たり前で参加するようになつたのだ。

ジジは落ち着いた表情で収納から回復ポーションを出し、指にかける。

すぐに傷は治つたが、俺は勞りの言葉をかける。

「慌てる必要はないから、怪我しないようにゆっくりと野菜を切るんだよ！」

「はい！」

ジジは元気よく返事をすると、たどたどしい手つきで再び野菜を切り始めた。

それを見ながら、俺がジジに野菜の切り方を上手く伝えられていれば……と落ち込む。

とはいへ前世からボツチで、女の子とのコミュニケーションスキルが皆無な自分には酷く話だな、と思ってしまうけれど。

そうそう、ピピからも四日目に参加したいとお願いされて、今では彼女も研修に加わっている。

正直俺としては、研修は大変だからピピには子供らしく遊んでいてほしいという心持ちはだつた。

だからやんわりと断ろうとしたんだけど……鑑定してみると、ピピは従魔のシルバーウルフであるシルと毎日のように走り回って遊んでいることで、各種能力値やスキルまで取得していたのである。これは人族ではありえないことだ。

遊びの延長のようない形なら良いかと思い、参加させることにした。

……仲間外れにされているよう思つてしまつたなら可哀想だしね。

それから数日、ピピのステータスの変化を観察しているんだが、ミーシャの研修結果と合わせて考えると、種族によつて成長の仕方が違うことが分かつた。

まず能力値の『力』のステータスの上昇率は俺、ミーシャ、ピピのよう順だ。つまり狐獣人のミーシャや兎獣人のピピは人族より力がつきにくいのだと分かる。

逆に能力値の『素早さ』の成長の仕方はピピ、ミーシャ、俺と逆の結果になる。

スキルに関しては、ミーシャやピピは気配遮断や気配察知などを早く取得できた。

狐獣人は静かに忍び寄つて獲物をしとめるような戦い方が最も適した種族特性で、兎獣人は逃げ足の速さや気配を消すことに長けてるので、ヒットアンドアウエイが得意な種族特性だと考えられる。

まだ検証例が少ないので推測にはなるが、種族によつて得手不得手に関するある程度の傾向が見られると考えて良さそうだ。

そんなこともあつて、今は俺としてもピピの研修に関してはちょっと乗り気になつてしまつている。

とはいへさすがにボーションを調合して作った専用のドーピング薬を作つて渡すのみで、毒薬と麻痺薬は渡してはいけないし、直接指導もしていかないけど。

「……よし、上手くできたな！」

そこまで考えたタイミングで夕飯が完成したので、俺はジジと料理を食卓に運ぶのだった。

## 第2話 僕が元凶なの？

翌日、今日も朝から家の建設をしていると、アーリンが近づいてきた。

彼女は年齢的にはミーシャやジジより年下だけど、貴族家のお嬢様でしつかりしているから自然に女子のまとめ役になつた。

訓練の手順やお風呂に入る時間まで、アーリンが全員の予定を管理して、シルの食事に關してもビビに指示を出している。

そのおかげで俺は夜間訓練だけ参加すれば良いので、正直助かっているのだが……。

「テンマ先生、お話があるのでよろしいでしょうか？」

アーリンがなんとなく怒つているような気がする。

しかし、俺には怒られることをした記憶はない。

「あ、ああ 大丈夫だよ」

つい「どうもりながらもそう答えると、アーリンは真剣な表情で話を始める。

「テンマ先生は素晴らしい能力と知識をお持ちだと、私は思っています」

「あ、ありがとう」

褒められているのに、褒められている感じがしない。

「頭の回転も速く、誰に対しても非常に寛容で優しいです」

「う、うん」

するとアーリンは意を決したように俺に人差し指を突きつけ、言う。

「でも、人としては最低かもしません！」

えっ、えええーーーー！ どういうことお？！

「失礼なのは承知の上、このままではテンマ先生が周りの人から嫌われてしまふと思ったので、忠告させていただこうと決心しました！」

人から嫌われる！ それって前世と一緒にやん！

俺は窺うように口を開く。

「く、訓練が厳しすぎた、の、かな？」

しかし、アーリンは首を横に振る。

「訓練が厳しいのは当たり前です！ それに厳しい訓練も、テンマ先生は必要性を丁寧に説明してくださいますし、説明の通りの結果が出ているので、誰も不満を持ってなどいません！」

それじゃあ、何が不満なんですか――――  
頭を抱える俺を見て溜息を吐き、アーリンは言い放つ。  
「問題なのはテンマ先生の性格です！」  
それって、研修が厳しいとかよりよっぽど最悪じゃん！  
愕然とする俺に、アーリンは続ける。  
「テンマ先生は色々人に優しくしていますが、まずそれが大問題です！」  
それは良いことじゃないの？

疑問に思つてアーリンのことを見ると、彼女は再度溜息を吐く。

「はあ……テンマ先生は分かつていよいよですね！」

アーリンはそう言つと、気合を入れるように俺をしつかりと見て口を開く。

「私は何度も冒険者ギルドに行く際に一緒にさせていただきましたが、行く度にお土産としてクッキー や ジャーキー をギルド職員に渡していますよね？」

「は、はい」

俺はいつの間にか正座しながらアーリンの話を聞いていた。

「ギルド職員の人がジャーキーをお土産に渡されると、残念そうな反応をしているのに気が付いていますか？」

それには気付いているので頷く。



「そうなのですね。でも、無償でロンダの町でも人気のジャーキーをもらつておいて、残念そうにするギルド職員になぜ怒らないのですか？ いえ、別に怒らなくてもいいです。そんな失礼な反応をされているのに、お土産をなぜ今も渡しているのですか？」

「甘味の方が貴重だから、ジャーキーがそれより喜ばれないのは仕方ないかなって……それにジャーキーは人気があるけど、俺はすぐに作れるから大した物じゃない……」

そう答えると、アーリンは目を吊り上げて反論してきた。

「だからテンマ先生は人に嫌われることになるんです！ テンマ先生は相手のことを考へているようで、まったく理解していません！ 無償で物をもらい続ければ、相手にとつてそれが普通になつてしまします。すると相手の要求はどんどん過剰になり、テンマ先生がそれに応えられなくなつてやめてしまうと、今度はそんなテンマ先生に相手は腹を立て、文句を言い、離れていくんです！」

言われてみれば、思い当たることがありすぎる。

あれつ、これ前世でも同じことをしていたような気がするぞ……？

アーリンは更に言葉を重ねる。

「ミーシャさんと一緒に行動することになつた経緯も聞きましたが、それを聞いたとき私はミーシャさんを嫌いになりました。村や家族ぐるみでテンマ先生を利用しようとしているのが明白じゃないですか！ 深く考えもせずにそれに乗つたミーシャさんは最低だと

思いました。でも、そうさせたのはテンマ先生が中途半端に優しいからです！ ハツキリと断ればミーシャさんも諦めだし、彼女の家族もそこまでしなかつたんじゃないですか？」アーリンがそう思つていそうだなということには気付いていたけど……。

「確かにその通りだが、ミーシャとはきちんと話し合つたから問題ないはずだよ」

俺の言葉に、アーリンは頷いた。

「それを聞いたから、ミーシャさんを嫌いにならずに済みました。今のミーシャさんには甘えはないし、テンマ先生にお世話になつた分をいつかお返ししたいって言つてているのを聞いたから、今では仲良しです」

そ、そなんだ……。

胸を撫で下ろす俺に、アーリンは次なる疑問を投げかけてくる。

「ジジちゃんのことはどうお考えですか？ 彼女は本当に一途で頑張り屋です。でもジジちゃんは不器用。そんな彼女をあえて料理をさせるために雇つたと言われても欣然としません。家族なんて言ひながら、同情して雇つただけじゃないでしょうか？ それとも本当にエッチなことを考えているのですか？」

俺は少し考える。

アーリンが言つてていることは間違つてゐるのだが、どう説明したものか……。

あまり自分のチートさを人に知られたくないけれど、これはたぶん正直に言わないと

納得してもらえないよな。

考えをまとめてから俺は口を開く。

「それについては誤解だよ。ジジには本当に料理をしてもらおうと考えていたし、他にも家事を任せるつもりだよ。それに鍊金術も覚えてもらおうと思つていてるんだ」

「で、でも、ジジちゃんは不器用だから……」

「その通り、ジジは他の人より少し不器用だね。そして体力も力もないから、練習の時間だってそう長くは取れない。でも、体力と力は研修で鍛えればなんとかなるし、頑張り屋のジジなら不器用さも努力でカバーできると俺は信じてるんだ」

「でも、それならもと良いい人が——」

尚も食い下がるアーリンの言葉を制して、俺は言う。

「ごめんね、人には言つたことがないけど、俺には人の素質が分かるんだ。だからジジの料理と鍊金術の素質がすごいんだって確信できる」

「……本当ですか？」

アーリンは訝しげな視線を向けてくるが、俺は胸を張る。

「ああ、本当だよ。そしてアーリンの魔術師としての素質や適性もすごいと思っている。

そうじやなければ、領主の娘と関わるなんていうリスクの高い案件、依頼でも断つっていただろくなあ」

アーリンは元々大きな目を更に大きく開いて驚いている。

「私はてっきり、お父様や大伯母様に頼まれて仕方なく私のことを……」

そうか、と俺は思い至る。

こうして色々と聞いてきたのは、自分がもしかしたら俺の邪魔になってしまっているんじゃないかという不安もあったんだろう。

ミーシャよりも、ジジよりも、領主の娘である自分を引き受けることのリスクが高いことは彼女自身が一番知っているのだ。

俺は努めて優しい口調で言う。

「アーリンがさつき話してくれた、俺の性格や中途半端な優しさが良くないことは、自分でも思い当たる節があるし、反省したよ。言い辛いことをハッキリと言つてくれてありがとう。確かに俺は流されるような形で、ミーシャやアーリンを訓練することにした。でも稽古をつけようと思った一番大きな理由は優しさじゃなく、ドロテアさんと同じ探求心だよ。俺とは違う素質を持つた二人が、どんな成長をするのか検証したかったんだ。俺の個人的な欲求で一人を利用しようと思った。結果的に二人のためになると自分に言い訳しているけれど、罪悪感はある。だから食事や装備を提供してるんだ。そんな俺をアーリンは軽蔑するかい？」

アーリンは少し動搖した表情を浮かべたが、しっかりと俺の目を見て答えてくれた。

「ちょっとテンマ先生のことを誤解していたようです。なぜ大伯母様に対してだけ、少し厳しいのか分かった気がします。要するに大伯母様と同類——研究のことになると他のことを考えない研究馬鹿なんですね？」

ええと、そこまで酷くないとと思うけど……。

俺は予想外なところからのダメージに、よろめきそうになりながらも反論する。

「た、確かにそうとも言えるけど、ドロテアさんほど暴走はしていないつもりなんだけど……」

すると、それにはアーリンも頷いた。

「そうですね。確かに大伯母様は、他人の迷惑を考えないところがありますね。まだテンマ先生は相手のことを考えているのかもしれません……」

ほうと溜息を吐く仕草を見ながら俺は思う。この子は本当に十二歳なのだろうか、と。そんな俺の内心など知らず、アーリンは思考を整理し終えたのだろう、晴れやかな表情で手をパンと打ち鳴らす。

「分かりました！ 正直、人のいいテンマ先生に、無理やり両親や大伯母様が頼んだから、私の訓練をしてくれていて、申し訳ないと思っていました。でも、テンマ先生が検証をする意味もあるのだと知つて、心が軽くなりました」

……切り替えの早い子のようだ。

俺はおずおずと言う。

「そ、そうだね。あと周りに嫌われそういうことをしてしまっていたら、お、教えてくれると助かるかな」

「了解です！」 ではこれから交渉事などは事前に相談してください。先日のカロン商会との契約みたいな調整もできますし、父との研修の依頼料の交渉もお任せください。今回の依頼料は研修の経費や成果から考えると安すぎます」

この間、知識などの権利を登録できる『知識の部屋』でこの世界にはない燻製の方法をカロン商会名義で記録するようお願いした。その際、金が欲しいわけでもなかったので無償で情報を渡そうとしたのだが、一緒にいたアーリンが途中から仕切ってくれたのだ。その結果、表面的にはカロン商会の権利としながらも、実質俺の権利として登録できた。研修の依頼料にしたって、俺としてはどちらでも良いのだが、先ほどアーリンに言われた通り施しすぎてしまった結果になると後が怖い。お願いすることにしよう。

「よ、よろしくお願ひします」

「無償で人に物を渡すときは、必ず私の許可を取つてくださいね！」

「わ、分かりました……」

対外的なことはアーリンが仕切ってくれることになり、頼りになるなと思いながらも彼女が少し怖くなる俺だった。

### 第3話　どこでも自宅完成！

アーリンから説教をされた日から更に十日経過した。

あれから冒險者ギルドに二度ほど納品に行つたが、お土産を渡すことはしなかつた。二度目にお土産を渡さず帰ろうとする、受付嬢のルカさんがそれとなくお土産を催促してきたが、後ろに控えるアーリンが視線を送ってきたので、俺はハツキリと返事した。「ハニービー」の蜂蜜は簡単に手に入る物ではありませんし、ジャーキーはカロン商会で商品化の準備を始めてるのでお土産としてはもう渡せません！一通り挨拶も済んだと思いましてですので、我々だけ毎回お土産を渡していたら、賄賂みたいで他の冒險者に変に思われてしまいそうで困るので……」

そんな感じで後半はもによもよしてしまったが、俺としては頑張ったほうだと思う。

また、この十日間の間にカロン商会は無事に小型の燻製施設を完成させた。しかし試作品を食べたが、自分の作ったジャーキーと食べ比べると美味しくない。

とはいえ味付けが塩だけの調味液で作つたにしては、食べられる物にはなつていた。

カロンさんも既存の干し肉より商品として魅力的だと自信を持つていてるようだ。

ついでにフォレストボアのベーコンやホーンラビットの腸詰を教えると、それにも挑戦したいと気合たっぷりで答えてくれた。

最後にカロンさんから、俺の作った商品を広めないようにお願いされて、アーリンからもう人に配つてはいけないと銅を刺されてしまったのである。

それくらい俺でも心得ていたよ……たぶん。

アーリンはこの間言つていた通り彼女の父親と交渉して、訓練依頼を一度完了扱いにして、改めて依頼を受け直す形で着地させた、とのこと。

一ヶ月で金貨三千枚での契約だったところを、金貨三百枚にしようと交渉していたが、辺境の准男爵家ではさすがに払えないでの、一ヶ月金貨百枚に決まった。アーリンは納得していないようだ。

自分の家だというのにシビアだな、なんて考えてしまう俺である。

そういつた外交的なところをアーリンが担つてくれたために、俺は負担が減り、家の建設に集中できる……と思っていた。しかし研修が進むごとにポーションを使う量が多くなる上に、ピピが研修に参加するようになつたこともあって、研修用のポーションを作るための素材が足りなくなつてしまつた。だから半日は素材採取に時間を取られてしまつて

いる。

それでもコツコツと建設を進めてつい昨日、やっと家が完成した。  
内装を整えていない部屋もあるが、お披露目できる状態になつたので、今日は午後から披露会をするつもりだ。



訓練の後、みんなが家のテラスに集まつてくる。

辛そうにテラスに上がってきたみんなを代表して、アーリンが口を開く。

「テンマ先生、朝からの訓練でボーションを飲みすぎて誰も昼食を食べられる状態ではありません。先にお風呂に入らせてもらえませんか？」

あ、ボーションの飲みすぎを考慮していかつた。

そういうば最近は昼食を一人で食べていたし、他のみんなが昼食をどうしているのか把握していないからすっかり忘れていた。

それなら先に新居のお風呂に入らせてあげよう。

「じゃあ、新しい家——どこでも自宅のお披露目を兼ねて、先にお風呂に案内するよ。ついてきて！」

俺は先頭に立ち、どこでも自宅の玄関に向かう。

家の名前はD研内にある自宅だからどこでも自宅、というシンプルな成り立ちだ。

どこでも自宅は滝の上部に架かる橋の上に立つていて。

玄関の前に到着すると、みんなが驚いてくれるのを期待して振り返る。

そこには先ほどより辛そうにしているみんなの顔があつた。

鑑定すると状態異常の表示はないので、単に訓練の疲れが出ているのだろう。

玄関の魔道具で個人を認証して、不審者が入らないようにしていると説明したところでも誰も聞いてくれそうにないので、説明は後にする。

綺麗に裝飾された大きな扉は、触れただけで左右に開いた。

これは前世の自動扉を参考にして作り上げた魔道具で、シルでも出入りできるよう、スライドして開閉する扉だ。

みんなは辛そうにしながらも驚いている。

中に入ると、二階まで吹き抜けになつていて広いホールがある。

正面にはリビングに向かう扉、左には二階に続く大きな階段が見えた。

お風呂は二階にあるので、階段を上る。

そして右に進むと、廊下がある。

右手にはいくつかの部屋の扉、左手には暖簾のある入口が二つ並ぶ。

俺は暖簾を指し示して言う。

「ここが新しい風呂だ。左が男性用、右が女性用だ。みんなはそちらから入ってくれ。どちらかの脱衣所に入ると、入った人が出てくるまでもう片方には入れないようになつていて。浴場は男女共用だから、中で鉢合わせるのを防げるんだ」

たゞ、間違つて領主の娘であるアリリンを相手

厄介なことになりかねないと考え、そのリスクを排するのを優先した形だ。

明が終わつたら俺はいなくなるから、ゆつくりとお風呂に入つてくれ』

俺はそう話すと「女」の暖簾を潜る。

も置いた。

されば訓練のために、自分で生活魔術の一種であるプロウを使って髪を乾かしては  
が、まことに全員上手く温風が出せないので仕方ない。

右手にはロッカーが並んでいるものの、それは飾りというか、

今いるファンナーは全員魔道具は服を收納できるので必要ないかんな

それだけではない。

日本の銭湯のよう<sup>せんとう</sup>に所々にテーブルセットや長椅子や、ドリンク専用の冷蔵庫も置いて<sup>ながいす</sup>いる。中には前世の牛乳瓶を模<sup>も</sup>した瓶に入れたブルーカウの牛乳やフルーツ牛乳、様々な果物のジュースが入っている。

それらを一通り説明すると、俺は「そちらの扉から浴場に入れるから楽しんでくれ！」と言ひ残して、脱衣所を出ようとすると。

しかし、後ろから服の裾を引いて張られた。

最近のあなたは素晴らしい！

ビビは嬉しそうに俺を見ていて、ジジは少し恥ずかしそうにしている。アーリンは気にした素振りもない。

俺は仕方ないなあと言いながら、外に出て着替える。  
そして女子の着替えを待つて、浴場へ。

正面は一面ガラス張りになつておおり、川の上流側が一望できる。ブールのような大きな湯船には、小さな滑り台が取り付けてある。また、その他にも様々なお風呂があるのである。

シルが速攻で大きな湯船に飛び込むと、ピピがそれを追うようにひらひらとした飾りの付いた水着で走ってきた。

「お兄ちゃん、ここのお風呂すごい！ シルと遊んでも大丈夫？」

「ああ、でも気を付けるんだよ」

ピピはすぐにシルのほうに向かっていく。

他のみんなは全員ワンピースタイプの水着を着用している。

一応ビキニタイプも渡していたのだが、この世界では受け入れられないのだろうか？

ジジは恥ずかしそうに俺を見ている。

おうふ、ジジはワンピースでもすごい！

訓練で少し筋肉が付いてきたようだ。

かつては胸は大きかったが、あまりいい物を食べられていなかつたせいか、それ以外はどこか貧弱な感じでアンバランスなスタイルだった。

しかし今はいくらかバランスの取れたスタイルになり、破壊力が倍増している。

そしてアーリンは……年齢相応、って感じだな。

「まずはポーションを抜きたいよな？」

そう聞くとジジ、アーリン、ミーシャが頷いたのでスチームサウナに案内する。

「これはスチームサウナだ。蒸し風呂と言ったほうが分かるかな？」

するとアーリンが嬉しそうに答える。

「蒸し風呂は王宮にあると聞いただけで見たことがありませんでした。それがこれですか！」

確かにこの世界の文明の水準を考えると、サウナが一般に普及しているとは思えない。むしろ王宮にあるだけすごいのかかもしれない。

俺は頷いてから答える。

「そうだ。汗が大量に出るから、ここでポーションの水分をしつかり抜くことができる」  
それを聞いた三人は喜んで中に入していく。

俺は彼女達を見送つてからシルとピピのもとへ。

滑り台で遊んだりプカプカ浮いたりしながら風呂を堪能した。

五分ほどするとサウナに入つていた三人が出てきて、汗を流してから湯船に浸かる。  
それからしばらくのんびりした時間を過ごし、俺はシルとピピとともに一足先に風呂を  
出た。

シルをモフモフになるまでブラッシングしてから、廊下でみんなが出てくるのを待つ。

風呂上がりのシルモフは至高の時間だなー！

ピピと一緒にシルモフしていたのだが、しばらくしても他の三人は出てこない。  
女の子は何かと時間がかかるから仕方ないか。

それから一時間以上経った頃、三人は出てきた。

「テンマ様、お待たせしてすみません」  
ジジは本当に申し訳なさそうに謝つてきたが、アーリンとミーシャは気にしていないようだ。

「それより部屋に案内するよ」

そう言つて、階段から一番近い部屋の前に行く。

「ここはジジとピピの部屋だよ。他の人は承諾がないと入れない。ジジ、扉に魔力を流せば聞くから、試してみてくれないか」

ジジに部屋を開けてもらう。

部屋にはソファや勉強用の机があり、奥には滝側の景色が一望できる大きな窓がある。

「そこの扉の中が寝室になつていて、収納と化粧台もあるよ」

ミーシャもアーリンもジジ達と部屋の中を確認している。ジジが一通り部屋を見て回ると、焦つたように戻つてくる。

「テンマ様、私達にこの部屋は贅沢すぎます！」

「気にしなくても良いよ。これからジジには頑張つてもらうから、部屋ではゆっくりしてほしいんだよ」

それでも申し訳なさそうにするジジは本当に良い子だ。

その後、ミーシャとアーリンも部屋に案内する。

「こちらは一人用の部屋だからジジ達の部屋より少し狭いが、基本的には同じような作りになつていてる。

「一人で寝るのは寂しい」

ミーシャが突然そんなことを言いだした。

これまで四人一緒の部屋で寝てたしなあ。

「一番奥に広い部屋があるから使つても良いよ」

俺はそう言って廊下の突き当たりの部屋に案内する。

部屋の中の階段を上ると寝室があるのだが、そこにはキングサイズ二つ分くらいの大きなベッドが置いてある。

「この部屋は自由に使つて構わない。一人になりたいときは自分の部屋で寝てもいいし、みんなで話しながら寝たいってことならこの部屋で一緒に寝ればいい」

ピピはベッドで飛び跳ねて遊んでいる。  
ミーシャ達も布団の感触を確かめて、ご満悦のようだ。

それから俺らは部屋を出て一階へ下り、今度は玄関の向かいにある扉を開ける。

広いリビングにはソファやテーブルがいくつも置いてある。

また、滝側に大きな窓があり、横にある扉からテラスに出られるのだ。

そしてリビングを挟んで反対側には二十人ぐらいが一緒に食事をとれるダイニングや、大きなキッチンがあり、入口から一番遠い扉の奥は各種工房へと繋がる廊下になつていて、みんなは最初こそ驚いていたが、途中から何か諦めたような、呆れたような顔をしていた。

俺はどこでも自宅の説明をこう結ぶ。

「俺が作ろうと思っていた設備はほとんど作り終えたし、明日から俺も加わって本格的な訓練を始めよう！」

なぜか全員が目を見開いて驚いている。

まだ基礎訓練しかしていないんだけど、みんなの認識は違つていたってことかな？

すると、固まっていたアーリンが、慌てたように相談してくる。

「テ、テンマ先生、ほ、本格的な訓練をする前に、お願いがあるのですが？」

「んつ、何？」

「じ、実は四日後が私と大伯母様の誕生日なんです。貴族にとって十三歳の誕生日は特別で、大伯母様も六十歳という節目を迎えるので家で盛大に祝う予定なんです」

ああ、貴族だとそういうのがあるのか。

ドロテアさんには赤いちゃんちゃんこでもプレゼントしてあげようかな！

アーリンは続ける。

「それにジジも三日後に成人を迎えますし、ミーシャさんの誕生日も五日後です。できれば一緒に祝いできないかな、と」

そうか、意外にみんなの誕生日って近いんだよな。それはしっかりと祝つてあげないと！

「良い考えだね。主役なのに申し訳ないんだけど、日程とかはアーリンが調整してくれるかい？」家の都合とかもあるだろうし。本格的な訓練はその後で構わないよ」

そう言うと、アーリンは嬉しそうに頷く。

「ありがとうございます。それでは費用は出しますので、食材の用意をお願いしてもいいですか……？」

無料で良いと言ふと怒られそうだな……。

「必要な食材の種類や量、金額もアーリンのほうで調整してくれたら調達するよ。ジジとミーシャの誕生日も兼ねているし、金額に関しては負担にならない範囲でアーリンが決めてくれると助かるな」

アーリンの表情を見ると、微笑んでいるので正解だったようだ。

「分かりました。お任せください」

こうしてどこでも自宅の紹介は終わつた。

そしてその後、昼食兼夕食としてホロホロ鳥のフルコースを新しいテラスで食べたのだつた。

## 第4話 エルビス商会の大失態

どこでも自宅のお披露目をした翌日。

俺らはアーリンの提案で、誕生日の準備をするためにロンダの町に行くことになった。ミーシャとアーリンは冒険者ギルドの納品の際に来ていたが、ジジ達は俺に引き取られてから、初めて町に戻ることになる。

町に移動するのは午後からなので、俺は朝から食材を確保しに行っていた。まずハニービーの巣に向かい、蜂蜜を採取する。

かれこれ蜂蜜の採取は三度目だ。

甘味は定期的に摂取したくなるし、それに冒険者ギルドにクッキーを差し入れていたからな。

……アーリンの怒り顔が過ったので、頭を横に振り、搔き消した。

そういえば、前回来たときにレッドベアが巣を襲っていたことを思い出す。

あのときは俺の蜂蜜を奪わせるものか！ と衝動的に周辺のベア系魔物を殲滅してしまい、後で自分のお茶目？ な行動に少し反省したのである。

今回はそんなこともなく、さくっと蜂蜜を回収して森の中にある草原へ向かう。

そこにはブルーカウが群れを作っている。

ブルーカウからは牛乳が採れるのだ。

俺は最初に群れを発見したときのことを思い出す。

嬉しさのあまりスタンで群れごと気絶させた俺は、倒れているとミルクを上手く採取できることに気付き、土魔法で拘束してしまった。

しかし、群れのブルーカウからミルク採取していると、群れのリーダーは仲間を助けようと暴れてしまう。首や足から血が流れるのを見ているとさすがに可哀想で、回復魔法を使つて怪我を回復しつつ作業を行うようになった。

だが三日に一度ミルクを探りに行く度に同じことを繰り返すので、いつも討伐して食材として食べてしまうのも一案かと思い直す。

肉の付き方を確認するべくブルーカウリーダーの全身を触る。

ステーキも良いがやはりローストビーフのほうが良いかな……牛タンも美味しいだろうし、タンシチューも良いかも……と考えて正面に回り込んで舌を確認しようとする。

研修時代は牛系の料理にハマつて毎食牛料理を堪能していた時期があるくらいには牛肉が好きな俺だが、この世界に来てから牛系の魔物は食べていない。

だから、頭の中は牛タンで一杯だった。

しかし、ふと異変に気付く。

ブルーカウリーダーはなぜか暴れるのをやめて怯えたような目をして いるのだ。

どこかで見た覚えがあると思つた瞬間に、ブルーカウリーダーと繋がつた感覚があつた。またやつてもうたー！ シルを従魔にしたときの感覚と同じじやん！

なんて思うがもう遅い。

ブルーカウリーダーの鑑定をすると称号の欄に『テンマの従魔』が追加されていた。

俺は投げやり気味にブルと命名する他ない。

ただ、それ以降は拘束せずともブルが他のブルーカウに命令し、順番にミルクを採取させてくれたので、結果オーライではあるのか……？

そんなことを思い出しながら草原に到着すると、ブルがこちらに走つてくる。

ワンボックスカー並みの巨躯なので、地面が少し揺れている。

群れのブルーカウも後ろから付いてきている。

俺は群れを手の動きで制してから、言う。

「今日からお前達も一緒に暮らすぞ」

D研から出るときは最後にいた場所にしか出られないが、入る場合はどこでも扉を開ける。

俺はD研の扉を開いて、順番に中に入していく。

シルが中で待つていて、ブルーカウ達を川の上流の草原に案内する手筈になつて いるのだ。

すでにブルとシルの顔合わせは済んでいる。

最初、シルが涎を垂らしてブルーカウの群れを見ていたので心配していたが、ブルが俺の従魔だと分かつてからは、残念そうにしながらも仲良くしてくれている。

さて、移動しながらホロホロ鳥やフォレストボアも獲つていたおかげで、食材の準備は大体終わつたから、いつたんD研に戻るとするか。

ちなみにロンダの市場に初めて行つたときに購入したワイルドコッコの有精卵は魔力をを与えてやると無事に孵化した。

しかし卵が産めるようになるまで最低でも半年かかるらしいので、D研内の森の中で放し飼いにしている。

普通は成長する前に森に放すと、他の魔物に捕食されるのでやめるよう言われたが、他の魔物がないD研内であれば問題ないはずだ。